ジョーク飛ばし40年

ぞうぞ小象見て下さい

名前の「広蔵」コゾウと読む

同じコゾウと気が合い収集

気の利いたジョークは笑いを誘い座を和ます。ライオン商事副社長・山下広蔵さん（65）はジョーク、駄じゃれで営業活動を彩って四十年。先ごろ『ビジネスはジョークで始まる』（日本経済新聞社刊）という本も出したほどだが、オフビジネスもジョーク一色。名前の読み方からサンシタコゾウ（三下小僧）を自称し、そのコゾウにひっかけて小象の収集に精出している。

出合いは海外出張

「私の名前はヒロゾウだが、字づらからコゾウとも読める。三下小僧。販売の第一線で小売店回りに努めていた私はまさに小僧のようなもの。小僧精神で働きまくろうと思った」。その後、三十七、八年ごろから外国へ出張する機会が増え、たまたまノミの市で小象の置物に出合ったとたんの小象が三百頭も。

小象たちの国籍は欧州、中南米、東南アジアなどさまざま。材料も陶器、磁器、クリスタル、銅、鉄、ビスケ、ぞうげ、皮……と幅広い。一見するとどれも置物かおもちゃの感じだが、実は大違い。「置物以外に、テーブルベルや鉛筆削り、キャンドル、香炉、水滴、それに分銅などもある」。

小象の収集を始めたのは二十年ほど前から。最初はパリのノミの市で買い求めた。〝ライオンマン〟が小象を集めるのは〝ぞう〟してかという疑問もわくが、これは戦後、就職したライオン歯磨（現ライオン）で先輩から「君の名前はサンシタコゾウとも読めるね」と言われたことがきっかけ。

〝国籍〟は千差万別

「ぞう〟ぞご覧下さい」と案内された東京・下石神井の山下さん宅の応接間。いるわいるわ、かわいらしい小象の置物が書棚に所狭しと並んでいる。「全部で二百近くはありますか。これはパナマで買ったパナナの皮製、こちらは西独の貝殻製……」と次々に取り出してくれた〝極め付き〟はマッチの軸を大きめにしたほどのインドのマスコット。三頭の小象がつながったふたを開くと、なんと虫眼鏡でないと見えないほど

「どの小象もかわいいんだぞう」と笑顔で語る山下さん（東京・下石神井の自宅で）

「コゾウ同士の気持ちのつながりを感じ、よし小象の収集をしようと……」。海外へ行くたびに、ガラクタ市、ノミの市のたぐいをのぞいては手ごろの値段のものを買い、知人の土産も加わって数はうなぎ登り。

「小象はかわいいし庶民的。ジョークともどもこれからも続けます」と明るく笑う山下さん。ジョーク、駄じゃれ好きは子供のころからだという。小学生時代は先生のあだ名を付けるのがうまく「そこでペンを置いて」とよくいう先生は〝そこペン〟、「いいね、そうだね」が口ぐせの先生には〝ねーやん〟といった具合。

自然に広がる交際

就職してからも得意先と会うたびに、当意即妙のジョークを飛ばして喜ばせ、自然に交際の輪が広がった。自分だけでなく、会社の仲間にも笑いを――と、ライオン油脂とライオン歯磨の合併（五十五年）の二、三年前に両社の落語好きとはかって「ライオン寄席」を結成した。自ら「南茶亭気楽（ナンチャテイキラク）」と名乗って現在も年二、三回高座に上がる。

ジョークの効用を山下さんはこう語る。「周囲を明るくさせ、人間関係がうまくいくし、自分も笑うことでやる気が出る。こんないいことはないですよ」。そして「人を見下したところからジョークは出ない。たくまずしてけんそんにつながるようなジョークが言えるようになりたい」とも。

四十八年に現在の住所に引っ越すと、同じ町内に山下姓が二十六軒もあるのが分かり、姓にも関心が広がった。「柳田国男の『地名の研究』によると、山下はもともとサンゲと読み、城山のすぐ下のことを意味したとのこと。城に異変があるとすぐ駆けつけた足軽が先祖だったんでしょうか。どれも小僧と通じます」。